

人間社会とコミュニケーション(I)

——システム論的視点からの一試論——

村上 則 夫

目 次

- I 序 言 —— 問題の提起 ——
- II システム・人間・自己組織性
 - 1. 生きているシステム
 - 2. 「人間」 —— 自己組織システム ——
- III 個人と社会
 - 1. 社会的存在としての人間
 - 2. システムとしての人間社会 (以上本号)

I 序言 —— 問題の提起 ——

人間は社会的存在であり、通常の世界生活においては複数の人々と相互に多種多様な関係を取り結んでいる。動物や人間の体を構成している一つの独立した細胞が全くの孤立状態では機能し得ないように、人間社会という現実世界において、人間もまた全くの独立した孤立状態では生きていけない。社会制度や社会構造等は歴史的な流れの中で変化していくが、原始的な狩猟技術を用いて生活資源として動物を捕獲していた狩猟社会に生きていた人間であろうと、先端的な科学技術等の開発・利用によって

アルタイムで多彩かつ大量の情報が世界中を飛びかい、かつ又個性的なライフスタイルの選択度が高まりつつある高度情報社会に生きている人間であろうと、人間が単独の孤立状態では生きていけないとする、そのあり方の基本は変わらないといってよいだろう。

フロムは著書『人間における自由』(Man for Himeself)において、「一人の人間は、全人類を代表している。彼は人類の特殊な一例である。彼はほかならぬ『彼』であり、『すべて』である。彼は自らの特殊性もっているという意味で、独自の個人であり、同時に人類のもつあらゆる特徴の代表者でもある⁽¹⁾」と述べ、「人間は孤独であると同時に、かかわりあって生きている⁽²⁾」と指摘している。まさしく、人間は社会的な相互の様々な形態・方法での接触を必要とし、自己たる個人と他の個人、即ち他者との相互関係において存在していると考えられる。

そして、人間と人間との相互関係、人間と社会との相互関係及び社会と社会との相互関係という複雑な現象の理解ないし説明に不可欠なのが様々なコミュニケーション問題(コミュニケーションの性質、構造、過程及びその役割や影響等)である。周知の如く、コミュニケーションに関する諸研究は、社会心理学、社会学、組織論及び情報科学など様々な領域において多様な展開、多面的な検討が行なわれている。そして、現代においては、ロジャーズが「新通信技術の出現は、コミュニケーション学の研究分野をして人間社会におけるもっとも重要なテーマに昇格させている⁽³⁾」とする指摘からも知れるように、飛躍的な情報技術の発達とは地球的な規模でのコミュニケーションを可能とし、人間の創造性を高め、知の獲得と共有を可能せしめているといえる。しかし、情報革命によってコミュニケーション研究領域に新たな一連の問題群が提起され、そして又、現代では人間の生き方、人間関係の難しさ及びコミュニケーションのあり方が問われているのも事実である。社会的存在である人間相互間のコミュニケーションは、人間が生きるための根本であり社会の形成及び発展の重要な一要因であるにもかかわらず、その内実は必ずしも明らかではない。

そこで、本稿では基本的にシステム理論の立場からの視点をもちつつ、人間及び人間社会をシステムと捉え、人間と人間との関係（自己と他者とのかかわりあい）及び人間と社会について若干の検討を加えた上で、コミュニケーションに関する種々の見解や研究成果等を取り上げながら検討を進め、人間社会におけるコミュニケーションのあり様とその重要性を再認識し、更に現代的な課題等についても考えてみたい。

なお、本稿においては、「社会システム論」や「コミュニケーション論」そのものに関する理論的な流れに依拠した検討は意図していない。ここでは、あく迄社会的存在である人間の姿を考え、現実の錯綜した社会現象を視野においてコミュニケーションに関する考察を試みることに重点が置かれている。

- 注（１） Fromm, E., *Man for Himself: An Enquiry into the Psychology of Ethics*, New York : Rinehart and Company, 1947（谷口・早坂訳『人間における自由 [改訳版]』、東京創元社、1972、61頁）。
- （２） *Ibid.*, (同訳書、66頁）。
- （３） Rogers, E.M., *Communication Technology: The New Media in Society*, New York : The Free Press, 1986（安田訳『コミュニケーションの科学』、共立出版、1992、9頁）。

Ⅱ システム・人間・自己組織性

1. 生きているシステム

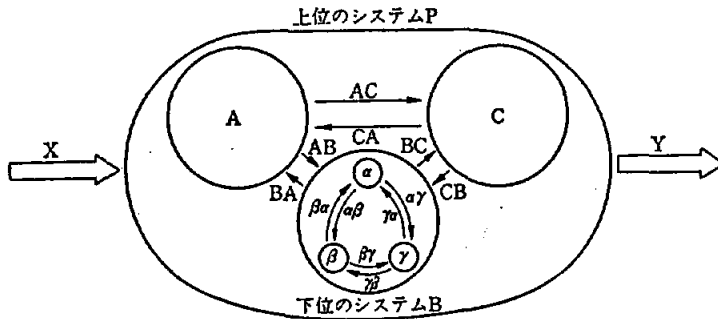
近代自然科学革命は、何よりも自然と人間の理性を神（学）の支配から開放し自律性を求めたことにある。即ち、近代自然科学革命＝近代合理主義論は神学的、形而上学的自然観からの脱却を求めた¹⁾。その結果、機械論的物質観としての近代的自然観が確立され、相対的に諸現象を個々の要素（部分）や性質に還元可能とする世界像を呈示し、世界を構成する諸

要素（諸部分）は個々に独立し一方向的因果連鎖的に結び付いた機械論的集積物となってしまった。ボームの言葉を借用すれば、世界が実際「ばらばらの諸断片から構成されているという幻想⁽²⁾」に陥ってしまったのである。非常に単純な機械的な人間観が出現してしまった。一言で明示すれば、ベルタランフィのいう「人間のロボット・モデル⁽³⁾」である。このような人間観の基本的特徴は、「人間をアプリオリに、生得的本能的要因から構成される、非常に単純な機械論的モデルでとらえ、しかも、このモデルを直ちに実体化して、人間のリアリティそのものと考えたことである⁽⁴⁾」。しかし、この人間観は次の三重の意味で不十分である⁽⁵⁾。それは、第一に人間観の原型モデルが余りにも単純過ぎて、人間の複雑な行為特性等が殆ど明確化できず、第二にそのモデルが普遍化され、実体化されてリアリティそのものと同一視し、そして第三にその概念構成が余りにも思弁的に行なわれ、科学的検証に耐え得る操作概念を含んでいない、という問題である。斯くて、我々は新しい人間像をシステム理論に求めるのである。システム理論は近代科学の機械論的、還元論的な思考の超克を志向している科学理論として主張され展開されている。先ず、ここでは、このシステム理論の概念や理論特性に立脚したシステム論的視点から人間をみていくことにしたい。さて、諸現象のすべてをシステムとする対象把握の方法を用いるシステム理論の立場から「人間」を捉えれば、人間とは生きている一つの組織化された統一的、複合的全体である。つまり、人間は生きているシステムである。「生きている」という状態は「死んでいる」状態と明確に区別可能な状態であり、細胞から器官、有機体、集団、組織及び社会、或いは生態系など様々な系に生きている状態があると考えられる。システム論的に規定すれば、生きている状態とは、生きている限りにおいて同じシステム条件を満たす必要があること、同形性（isomorphisms）としての全体性が表出していること、つまり、あるシステム条件設定がなされるときにのみ、システムが生きているといえる⁽⁶⁾。LS理論（Living Systems Theory）を展開したミラーは⁽⁷⁾、細胞から超国家に至る7つのシステム・

レベルを提示し、いずれのレベルにおいても19の不可欠な下位システムが存在することを認め、それらは大きく物質-エネルギーを処理する下位システムと情報を処理する下位システムとに分けて配列されている。また、清水氏は「生きているシステム」をホロンの集まりという観点から捉える科学を「バイオホロニクス」と呼び、生きていることの特徴は、調和又は秩序——個と全体の選択的な調和関係——にある、つまり生きている状態にあってはシステムを構成する要素はもはや単なる個ではなく、個と全体は互いにループで結ばれた階層構造をなしており、両者は機能的に分離することは出来ないと指摘されている⁸⁾。あるシステムを構成する複数の要素は、相互に影響を与え合う非常に密接な相互関係を形成しており、ある一つの要素に生じた変化・変動が他の要素に影響を与えながらシステム全体に行き渡り、またそのシステムそのものの変化・変動が個々の要素に影響を与えていくという、個と全体との緊密で不可分な関係が存在している。従って、もしある要素の影響が全体そのものに何ら伝わらず、逆に全体の影響が個々の要素に何らの影響を与えないとすれば、そこにシステムの存在は認められないのである。

一般的には、生きているシステムはそのシステムを構成している複数の要素間の相互関係、システムとシステムとの間の相互関係、そしてより大きな上位システム（システムにとっての環境）との相互関係——システム特性から具体的に表現すれば、インプット-アウトプット関係（input-transformation-output）——を通してより高度なレベルで安定化をはかり、動態的な非平衡（non-equilibrium）的秩序を形成し維持している開放系と理解されている。図Ⅱ-1において、Pというシステムに着目すると、機能はXのYへの変換であり、システム要素Bの、A、Cとのインプット-アウトプット関係はPの構造をなすが、Bというシステムに着目すると、A、Cとのインプット-アウトプット関係はBの機能となり、Bを構成する要素 α 、 β 及び γ の間のインプット-アウトプット関係がBの構造となる⁹⁾。ノーベル物理学賞を受賞したシュレーディンガーは「負

図Ⅱ-1 システムの構造と機能



Bの構造： $\{ \alpha\beta, \beta\alpha, \alpha\gamma, \gamma\alpha, \beta\gamma, \gamma\beta \}$ のパターン
 Bの機能： $\left\{ \begin{pmatrix} AB \\ CB \end{pmatrix} \text{の} \begin{pmatrix} BC \\ BA \end{pmatrix} \text{への変換} \right\}$
 Pの構造： $\{ AB, BA, AC, CA, BC, CB \}$ のパターン
 Pの機能： $\{ X \text{の} Y \text{への変換} \}$

(出所) 中山慶子「社会システムの形成」中山他『社会システムと人間』、福村出版、1987、51頁。

エントロピーの流れを吸い込んで、自分の身体が生きていることによって作り出すエントロピーの増加を相殺し、生物体自身を定常的・かなり低いエントロピーの水準に保っている」とし、生物が自分の身体を常に一定のかなり高い水準の秩序状態（かなり低いエントロピーの水準）に維持している仕掛の本質は、実はその環境から秩序というものを絶えず吸い取ることにあると指摘している⁽¹⁰⁾。換言すれば、システムが完全に自己完結的な閉鎖系で環境との相互関係が一切遮断されていれば、熱力学的平衡を避けきれずに自己の維持ないし存続が不可能となり、最後にはシステム全体が完全に崩壊（死）する。しかし、開放系——生命体だけが唯一の開放系ではないが——である生きているシステムは環境から持続的にエネルギー、物質及び情報を導入・変換しエントロピーの増大を避けて動的な

非平衡的秩序を自律的につくり出している自己組織化の機能（能力）を有しているのである。

- 注（１） 高瀬浄『エコノミーとソシオロジー —— 象徴社会からの知的回帰 ——』、文眞堂、1989、9-10頁。
- （２） Bohm, D. J., *Wholeness and the Implicate Order*, Routledge & Kegan Paul Plc, 1980 (井上他訳『全体性と内蔵秩序』、青土社、1986、34頁)。ボームの見解については以下の文献も参照されたい。
Bohm, D. J., *Fragmentation and Wholeness*, The Van Leer Jerusalem Foundation, 1976 (佐野訳『断片と全体』、工作舎、1985)。
- （３） Cf. Bertalanffy, L. von., *Robots, Men and Minds: Psychology in the Modern World*, New York: George Braziller, 1967. なお、サイモンズ(Simons, G.) は著書『人間はロボットか』(*Is Man a Robot?*, New York: John Wiley & Sons, 1986)において、現代の科学技術の高度な発達と理論的發展を踏ま形での「ロボットとしての人間」、つまり、人間をプログラムに従って機能するプログラムされたアナトミーであるとする展開を行なっているが、力作とはいえ、やはり人間をロボットと捉えるにはかなりの無理があると我々は考える。
- （４） 関・犬田・吉村『行動科学入門 —— 社会科学の新しい核心 ——』、講談社、1970、75-76頁。
- （５） この点は、同上書、76頁を参考としている。
- （６） 池田善昭『システム科学の哲学 —— 自己組織能の世界 ——』、世界思想社、1991、27頁。氏の理解する「生きているシステム」とは情報の〈放散〉(divergence) —— 〈集中〉(convergence) のダイナミクスによって自己組織化していくことであると説明している。
- （７） LS理論に関しては、次に示すミラーの著作を参照されたい。Miller, J. G., *Living Systems*, New York: McGraw-Hill, 1979.; Miller, J. G., & Miller, J. L., "The Earth as a System", *Behavioral Science*, Vol. 27, No.4, 1982.
- （８） 清水氏の主張については、清水博『生命を捉えなおす』、中央公論社、1978及び「ホロンとしての人間 —— バイオホロニズムとはなにか ——」石井他編集『マイクロコスモスへの挑戦』、中山書店、1984、27-80頁を参照されたい。
- （９） 中山慶子「社会システムの形成」中山他『社会システムと人間』、福村出版、1987、50-51頁。
- （10） Schrödinger, E., *What is Life?: The Physical Aspect of the Living Cell*, Cambridge: Cambridge University Press, 1944 (岡・鎮目訳『生命とは何か』、岩波書店、1975、129頁)。

2. 「人間」 —— 自己組織システム ——

これ迄検討してきた理解に沿って、人間というものをより明確に捉えれば、人間とは自己組織系（システム）であると言い得る。つまり、現実世界に生きているすべての人間は生きているシステムであり、より正確には自己組織システムである⁽¹⁾。従って、完全に環境決定的でもなければ消極的な意味での環境適応（受動的な環境対応）的な存在でもない。それは、環境の変化にうまく適応して自分を変えるだけの人間像ではなく、環境との相互関係の中で自己を自覚し自己を変え、かつ又必要となれば積極的に環境をも創り変えていくような能力を有した人間像のイメージである。

人間の頭脳が高度の知的能力を発揮できるのも、人間の優れた学習と自己組織性によるものと考えられている⁽²⁾。カプラは精神の自己組織化のパターンについても述べているが、彼の見解によれば「人間の心は、外部の現実を反映しつつも独自の存在権をもち、しかも個人あるいは社会を動かして外界に働きかけることが可能な内的世界を創造することができる。人間の場合、この内的世界（心理的領域）がまったく新しいレベルとして開花し、人間の性質に固有の現象を数多く包みこんでいる⁽³⁾」という。それは即ち、自意識、意識的経験、概念的思考、抽象的言語、夢、芸術、文化の創造、価値観、遠い過去や未来に対する関心等を含んでいるとしている。そして、「自己組織化のダイナミクスである精神作用は、すべての機能の組織化を表わすゆえ、超機能と言うことができ⁽⁴⁾」るとも指摘している。バックレイは、形態維持(morphostasis)と形態形成(morphogenesis)という概念を提示し⁽⁵⁾、形態維持の方はシステムの所与の形態、組織、或いは状態を保持若しくは維持する傾向にある複合的システムと環境との交換諸過程に言及し、ベルタランフィが生物体は定常的に物質交代しているため、その構成部分は一瞬の間もそのままではない。「生物の形態はある(sein)というよりむしろなる(werden)のだ。生物の形態は、生物体にはいりこみこれを作りあげる物質とエネルギーの、ひき続く流れを現している⁽⁶⁾」と指摘したところのものである。そして更に、形態形成の方は

システムの所与の形態、構造、或いは状態が洗練され、変化していく諸過程に言及するものであり、例として生物学的進化、学習及び社会の発展等を挙げている。このような説明から、バツクレイによって提示された形態形成という概念は自己組織系の概念と極めて相似していることが知れる。なお、ラズローの指摘によれば、彼のいう自己安定的なサイバネティクスⅠ（self-stabilizing “Cybernetics Ⅰ”）は形態維持に対応し、他方、自己組織的なサイバネティクスⅡ（self-organizing “Cybernetics Ⅱ”）は形態形成に対応するものとしている¹⁷⁾。

一般的に、自己組織性というのはシステムが環境との相互関係の中で、ゆらぎ(fluctuation)の増幅によって自らの組織を創出し、かつ又その構造を変化・変容させる性質を総称する概念であり、生きている状態にあるシステムが有している基本的特性と考えられている。平衡状態に近い領域にあるシステムにおいては、ゆらぎを打ち消す方向に緩和原理が働きゆらぎは衰退してしまう。その反対に、あるシステムが平衡状態から遠く離れた不安定状態にあると、局所的に発生したゆらぎが減衰せず増幅していくプロセスを通して旧来の構造が崩壊し、新しい秩序が生成される場合がある。これが「ゆらぎを通しての秩序」である¹⁸⁾。

この自己組織性に関する議論は、近年に至って我が国でも活発に行なわれているが、佐藤氏の考えでは自己組織性には二つの位相、或いはその両義性があるという¹⁹⁾。氏によれば、先ず第一の位相は他者との関係性における自己組織性である。この位相は他者との関係の中で、他者とのコミュニケーションを通して自己を自覚し、自己を組織し、自己を新たに形成するという意味での自己組織性であり、これを関係的自己組織性と名付けている。この自己組織性は他者——自然をも含む——を自己の発展のための手段として自己のうちに取り込んでする自己組織性ではない。「自己組織化を一元的に考えるのではなく、自己を他者と関係づけることによって、それぞれの自己を自己組織化するということと、その自己組織化をとおして関係づけそのもの——たとえば生活クラブ生協そのもの——の組織

もたえず新たに自己組織化されるという複合的自己組織化を考えることが重要である⁽¹⁰⁾。関係的自己組織性には、更に相互肯定的な自己組織性と相互対立的な自己組織性とがあり、前者は自己－他者関係においてそれぞれが自立的主体的自己を形成し、常に新たな自己を組織していくという相乗作用にある自己組織性であり、後者は他者によって抑圧的な状況に追い込まれた時に自己を覚醒し自己を再生する、そういう状況での自己組織性である。これらの自己組織性に対して、第二の自己組織性の立場は、進化的な自己組織性の考え方であり、これを独我論的自己組織性と名付けている。要するに、独我論的自己組織性とは他者との関係から、或いは既存の自己の依って立つ構造から全く自由に、つまり他者や構造ないしはシステムにとらわれずに自己準拠することで自己組織化する立場であり、概して、近年盛んに主張されている自己組織性の考え方は非構造的な独我論的な自己決定に基づく自己組織性を論じている傾向が強いという。氏によれば、「ゆらぎは既存のシステムの構造と機能を前提にして、それとの緊張をはらむ関係性のうちにしか、立ちあがらない」等として、関係的自己組織性の立場をとっている。氏の説明に従って、二つの立場からする自己組織性があるとすれば、我々もまた関係的自己組織性という考え方の立場に従いたい。但し、自己組織性を論ずる研究者の主張や議論は、現時点では必ずしも確定しているとは言い切れない面があり、今後の議論のゆくえや理論の展開を見定める必要が残されている。

この自己組織性という言葉は、これ迄自然科学分野で顕著な展開をみていたが、近年社会科学、特に社会学や組織論において、近代的な理論枠組みを超えて自己組織性をキー・ワードとする新たな視点からのパラダイムを構築しようとする研究が展開されはじめている。ヤンツは「自己組織化ダイナミクスは生物・非生物両領域にまたがり、それらを結び合わせるものだ。もはや生命を生命なき物理的世界の上に広がった超構造(superstructure)などに見做す必要はない。それは宇宙のダイナミクスが本来的に有している原理に違いないからである⁽¹¹⁾」と叙述するに至っている。

- (1) 伊藤氏は、「システム論的人間」の全体＝適応的自己安定・自己組織システムと規定している。氏の主張については、以下の文献を参照されたい。伊藤重行『システム哲学序説』、勁草書房、1988。
- (2) 市原英世「自己組織人——経営学の基本的仮定——」北川・伊藤編『システム思考の源流と発展』、九州大学出版会、1987、164頁。なお、市原氏はこの論稿において、よく知られたサイモン(Simon, H. A.)の管理人(administrative man)モデルを拡張した自己組織人(self-organizing man)の仮定の設定を試みており、有益なアイデアを得ることができる。
- (3) Capra, F., *The Turning Point: Science, Society, and the Rising Culture*, John Brockman Associates, 1982(吉福他訳『ターニング・ポイント』、工作舎、1984、490頁)。
- (4) *Ibid.*, (同訳書、485頁)。カブラは「精神のシステム論的見方は個々の有機体に限らず、社会システムや生態系にも応用されうる。いろいろな人間、社会、文化の集団は集合的精神をもっているから、集合的意識ももっていると言ってよかろう」(同訳書、494頁)とも指摘している。
- (5) Buckley, W., *Sociology and Modern Systems Theory*, Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, 1967, pp. 58-59.; cf. Sheldrake, R., *A New Science of Life: The Hypothesis of Formative Causation*, London: Muller, Blond & White, 1981(幾島・竹居訳『生命のニューサイエンス』、工作舎、1986)。また、「形態形成」に関する我が国の文献としては、例えば日本生物物理学会が編集した『自己組織化』及び『形態形成』(いずれも学会出版センター、1977)を参照されたい。
- (6) Bertalanffy, L. von., *Das biologische Weltbild. I. Die Stellung des Lebens in Natur und Wissenschaft*, Bern: A. Francke AG. Verlag, 1949(長野・飯島訳『生命』、みすず書房、1974、131頁)。
- (7) Cf. Laszlo, E., *A Strategy for the Future: The Systems Approach to World Order*, New York: George Braziller, 1974, pp. 33-41.
- (8) 谷本寛治『企業社会システム論』、千倉書房、1993、60-62頁。
- (9) 佐藤慶幸『生活世界と対話の理論』、文真堂、1991、124-127頁。氏は今田高俊氏の展開する自己組織性は「人間は社会的存在であり、関係性においてのみ、自己になり自己の自律性や主体性を形成し発展できるという社会学の視点を放棄して」(同書、132頁)いと指摘するなどかなり厳しい批判を行なっている。
- (10) 佐藤慶幸「共生社会の論理と組織」組織学会編『組織科学』、第24巻、第4号、丸善、1991、37頁。
- (11) Jantsch, E., *The Self-Organizing Universe: Scientific and Human Implications of the Emerging Paradigm of Evolution*, New York: Pergamon Press, 1980, p.19.

Ⅲ 個人と社会

1. 社会的存在としての人間

長い時代の流れの中で、いつも人間は自己の存在を問題にしている存在者であるが、人間ほど複雑なものを簡潔ないし簡略に理解するのは極めて困難なことである。そして、「個人と社会」及び「自己と他者」といった関係等も議論の尽きない基本的かつ重要な課題の一つである。

広く知られているように、アリストテレスは「人間は社会的動物である」と規定したが、人間というものが社会的存在であるという基本命題は人間という個人を他者とのかかわり合いの中で捉える重要性及び必要性を示唆する命題であることは議論の余地がないだろう。ハイデガーは私たち自身、即ち人間を現存在 (Dasein) と呼び、世界・内・存在 [世・に・あること] との関係を著書『存在と時間』(Sein und Zeit) の中で次のように述べている。つまり、現存在はそれ自身、固有の「空間・内・存在」をもって、しかもそれは世界・内・存在一般に基づいてだけ可能であるとし、「自分の存在そのものにおいて自分にかかわっている現存在の存在には、他人との共同存在が属しています。それゆえに現存在は、共同存在として、本質的に他人のために『存在する』¹¹⁾」。「他人への存在とは、自立的でもはや還元しえないような存在関係であるばかりでなく、これは共同存在として、現存在の存在とともにすでに存在しつづけています。つまり、共同存在に基づいて活着しているところの相互に知りあうことは、どれほど自己の現存在がそのつど、自分自身を了解したかということに、しばしば依存していることは、もとより争われない¹²⁾」としている。自己を問うことは、同時に他者、即ちハイデガーのいう他の現存在を問うことであり、世界は単に自己たる個人のものではなく、「ともに現に存在している」他者との共同の世界として理解することが必要であるといえる。

既述したように、人間は生きている一つのシステムであり、そして自由

意志をもち意識的に自己の存在を認識し得る独自の存在である。しかし、多くの昆虫——アリやミツバチのような社会性昆虫と称せられる類は別として——は社会というものを形成せずとも個体として生命を維持し生存できるが、人間は独立した自律的な存在ではあっても、現実世界において、人間は個体として孤立し他者と切り離され何らの関係もなしに生きていくことは不可能である。ラズローは人間というのは自然的実在 (natural entity) であり、幾つかの世界と相互関係を有する居住者 (an inhabitant) である¹³⁾と述べたが、孤立した個人というものは経験できない抽象であり、また個人から完全に切離されたものとしての社会もまた同様である。人間を人間たらしめるのは、自己そのものではなく他者とのかかわりにおいてであり、人間と人間との相互関係を通して、一定空間内や時間的な流れの中でもはや単なる孤立的状態から開放されて一つの社会的な共同ないし共存状態にはいる。そしてその時、個人は単なる有機体としての個体ではなく紛れもない社会的存在となるのである。従って、人間が何らかの原因で社会的な共同ないし共存状態を失った時には、事態は極めて深刻であることは——もっとも、現代においては緊密化する強弱の差はあるにせよ、個人の日常生活が集団や地域社会のルール等に規定、規制され、複数の他者との相互関係が一層強まりつつあり、ややもすると個人の独自性や個人的な考えが喪失していく側面さえあると指摘されており、このような状況はまた新たな問題を生じているのだが——敢えて強調するまでもないだろう。もし仮に、長時間のあいだ、単独で全くの孤立状態におかれれば人間としての死を意味するといってもよい。フロムは次のようにいう。「人間は孤独のままで、すなわち他人と関係しないで生きることにはできない。防衛、仕事、性的満足、あそび、子供の養育、知識と財物の伝達などといったことのために、彼は他人と協同せずにはいられない。しかし、そんなことよりも、彼は他人と関係し、一体となり、グループの一部になることがどうしても必要なのである。完全な孤立は堪え難いものであり、正気のままではそのような状態はあり得ない¹⁴⁾」と。

ミードは、「人間という個人の自我の構造と内容をつくりあげている社会的態度の組織化は、個人の中枢神経系の内部の神経系の諸要素、およびその相互関係の組織化をつうじておこなわれ、同時に個人が——社会的・集団的行動を遂行している社会集団の成員として——ふくまれている社会的・集団的行動もしくは行為の一般的な整序された型どりの関連でおこなわれる⁽⁶⁾」と述べ、人間社会は人間の精神と自我なしには存在できないことを強調し、その精神や自我は必ず他者との相互関係の中で形成され展開されることを明確に指摘している。動物は生まれつき備わった生得的な能力（本能）によって種々な生命の維持・存続、種の保存を繰り返している。動物における社会事象は、群れをつくることと原初的な家族形成に限られ、動物社会には村落も都市も企業も国家も産業化も近代化もないが、人間の社会生活の方は高度に精神的な意志的活動としての意識的な他者との協働と秩序形成の努力とともにあり、それは人間に固有のものである⁽⁶⁾。動物の観察記録によると、サルなどの高等動物では母親から拒否された子どもは成長が妨げられるし、群れから離された動物は凶暴性を帯びてくるという。ヘンドリヒスによれば、人間が（子供として）世界への相互関係の中で実現する自分の意識の構造があり、人間は成長する意識で自己と世界を観照し、自己についての像、世界についての像、そしてそれらの両者の相互作用についての像を発展させるという⁽⁷⁾。

本来、人間は生得的な能力（本能）の幅が極度に狭く、幼児は密接な対人関係にはいることで、初めて健康に成長するのであり、その欲求や能力及び気質も他の人間との対人関係の中で開発されていく。幼児にとって、対人関係は精神発達全体にとって必要不可欠であるだけでなく、対人関係の中で子供は次第に自我と他人とを区別する心理的な過程を経験するようになる⁽⁸⁾。逆に、この時期に人間的接触を欠き、文化的刺激（様々な社会的行事）を断たれると、人間的素質は開発されず十分に発達していない脳が人間の生活環境の中で働くのを教わらないので、数年の後には人間固有の種々の機能を喪失してしまい、非人間化された人間となってしまう。

従って、例えば、幼児が人間以外の動物と一緒に育てられるという異常な環境におかれれば、社会的人間として成長するかわりに動物的な人間となっていくことが推測される。それは、1920年にインドの密林でオオカミの洞穴にいたところをイギリス人の牧師に発見されたといわれる二人のオオカミ娘（カマラとアマラ）やアヴェロンの野生児ヴィクトールをはじめ、隔離された私生児などの諸事例はその事実を端的に物語っている⁽⁹⁾。ブーバーはいう。「幼児が最初に外界の物事を認め、それからあらためてその物事と関係を結ぶと見るのは正しくない。そうではなく、幼児は、なによりもまず、関係を結ぼうとするのである⁽¹⁰⁾」と。まさしく、大庭氏が指摘されておられるように⁽¹¹⁾、まさに人-間は死の影の下で、他者との間で（異物の動きの予測＝操作とは原理的に異なるかたちで）相互に呼びかけ一応ずるという〈呼一応〉の累積としてあり、人-間としての自己は、つねに〈他者によって呼びかけられ・応じられて在る今・此処〉という形態で存立するのであって、意識（Bewußtsein）は、Bewußtな（voll＝十全に、すなわち対象化的には知られざる今・此処をも知らしめられた）人-間的・社会的な存在（Sein）なのである。「実に、人間は、社会制度や社会構造のうちに相互の関係を確かめつつ行為するのであって、ここに歴史的な意味や制度・構造・システムをそれ自体主題として研究する、ひとつの社会科学のあり方が根拠をもつことがはっきりするのである⁽¹²⁾」。

それから又、生きているシステムである人間の存在を「全体と部分」という観点から理解するには、ホロン(holon)という概念を創案したケストラの主張をみるのが差し当り有益となろう。ケストラの主張に従えば、人間は島ではなく一個のホロンである。それは内側へ向かって見れば一個の自己完結した独自の全体であり、外側へ向かって見れば従属した部分であるという、ヤヌスの顔をもった実在（Janus-faced entity）である。彼の自己主張傾向（self-assertive tendency）は彼自身の全体性（wholeness）、ホロンとしての自律性・独立性のダイナミックな表明である。それと同様に、普遍的な対立物である統合傾向（integrative tendency）は、彼の属す

るより大きな全体への彼の従属性、即ち部分性の表現であると指摘した¹³⁹。複雑な生きているシステムを共同（連帯）して形成している多くの細胞が、一方で生命の複雑な新陳代謝と再生機能を働かせ、それ自体を構成する要素を統合して全体を形づくりながら存在し続け、また他方で統合された有機的共同体内で生命の諸要求に実に正確に自らを適合させている¹⁴⁰、などは適切な事例の一つであろう。もし、ケストラーが明らかにしたホロンの二傾向（自己主張傾向と統合傾向）の程よいバランスが崩れれば、即ち、両者の調和が崩れれば最終的にはシステムの崩壊に帰することになる。このことは、システムである人間であれ、人間社会というシステムであれ、或いはエコシステムにも妥当する。例えば、外界からストレスを受けその緊張が臨界を超えると、ホロンの自己主張傾向は抑制がきかなくなり、上位レベルのコントロールから逸脱しようとする。これは、人間であれば遺伝コードの支配を逃れた勝手気ままな組織の自己増殖を起こして、ガン細胞のように他の正常な細胞を無視した変化が認められるのと同じである。それから又、人間が統合傾向に由来する情緒、例えば、所属の欲求等に対して不満が生ずれば、自己批判の能力を失い損得に構わず何かを盲目的に崇拜したり、ある種の大儀名分に身を投ずることになるのである。

注（１） Heidegger, M., *Sein und Zeit*, 1927（桑木訳『存在と時間 [上]』、岩波書店、1960、236頁）。

（２） *Ibid.*,（同訳書、239頁）。ハイデガーいわく、「ともに」の性格をもった〔共同的〕世界・内・存在に基づいて、「世界はすでにいつも、わたしが他人と分ちもっているところの世界です。現存在の世界は、共同世界です。内・存在とは、他人たちとの共同存在です。他人たちとの内世界的な自体存在とは、共同現存在です」（同訳書、227頁）と述べている。

（３） Laszlo, E., *The Systems View of the World: The Natural Philosophy of the New Development in the Sciences*, New York: George Braziller, 1972, p. 79.

（４） Fromm, E., op. cit.（同訳書、82頁）。

（５） Mead, G. H., *Mind, Self, and Society: From the Standpoint of a Social Behaviorist*, Chicago: The University of Chicago Press, 1934（稲葉他訳『精神・自我・社会』、青木書店、1973、253頁）。彼によれば、「人間社会の個々

の成員だけが、精神と自我の社会的発達に必要な生理学的能力を所有している。したがって人間社会だけが、その構造と組織体の内部において、個々の成員のなかに精神と自我が出現した結果可能な水準の複雑性に到達することができる」(同訳書、252頁)のである。

- (6) 富永健一『社会学原理』、岩波書店、1986、18頁。
- (7) Hendrichs, H., *Modell und Erfahrung: Ein Beitrag zur Überwindung der Sprachbarriere*, München: Verlag Karl Alber CmbH Freiburg, 1973, S.58.
- (8) 南博『体系社会心理学』、光文社、1957、223-225頁。同書においては、対人関係の心理的な土台は、精神発達の順序からいって、自我が他人との交渉の中でどのような働きをするかということで決まってくるとし、自我の発達を他人との対人関係の面から七つの過程、つまり、一体化、同一化、役割、コミュニケーション、共感(同情)、模倣及び暗示という過程について検討されている。
- (9) これらの点については、森博『社会学的分析』、恒星社厚生閣、1969、143-145頁を参照されたい。
- (10) Buber, M., *Ich und Du*, 1923 (野口訳『孤独と愛』、創元社、1958、40頁)。
- (11) 大庭健『環境と人間——ホモ・ロクウェンスの〈文化の暴力〉への一試論——』、『物質 生命 人間』(新・岩波講座哲学6)、岩波書店、1986、293頁。
- (12) 杉浦克己『コミュニケーションの共同世界—— 関連社会科学序説——』、東京大学出版会、1993、4頁。
- (13) Koestler, A., *The Ghost in the Machine*, London: Hutchinson, 1967, p.56.
なお、ケストラーのホロンの概念については著者の以下の拙稿においても検討を試みている。拙稿「ケストラーのSOHOモデルの検討——ホロンの概念を中心に——」、『実践経営』、No. 13、実践経営学会、1986、62-68頁。
- (14) Laszlo, E., *The Systems View of the World*, op. cit., p.70.

2. システムとしての人間社会

人間は生きている一つのシステムであるとしたが、人間社会もまた動態的なシステムである。その存在形態は複合的で多重層化した開放系であり、ラズローの言葉に従えば「その諸要素間が反直観的で多重フィードバック・ループ(multiple feedback loops)になっている非常に複雑なシステム¹¹⁾」である。パウラーに言わせれば、「複雑な生命が生存する天体がないかどうか入念に調査してみたてわかったことだが、この地球上にあるような複雑な生物システムや複雑な社会システムが他の天体に存在するとはと

でも思われない⁽²⁾」と述べている。我々は宇宙科学研究者ではないので、地球以外の天体に関しての議論は行ない得ないが、パウラーの言葉はシステムとしての人間社会の複雑さをよく表現しているといえる。

物理的世界（物理—化学的諸事象）は人間の行為とかかわりなしに客観的に実在している存在論的実体であって、人間はその実在性を人間の有している五感を通じて感得できる。これに対して、社会的世界（社会関係や社会集団や地域社会といった社会的諸事象）は単に目で見ることが不可能だけでなく、物理的世界のように人間の行為とかかわりなしに存在している客観的な実在ではないのである⁽³⁾。山口氏は、「社会とは人間が他者と共に自己を対象化し、自らの行為を通じて生み出した、一つの創造物に他ならない。それゆえ、世界と同様、社会もまた、どこまでも人間の事行としてのみあり得、この契機を欠いた自足的な存在根拠を何一つもたない現実である。社会もまた、人間が行為と意識とを通じて不断にそれを実現化する限りにおいてのみ、存在し得るのである⁽⁴⁾」と説明しておられる。そして、このような社会に固有の基本的性格は重要な意味をもっているという。それは、社会が人間的契機を欠いてはあり得ないとすれば、それは人間がそれを如何に実現するかによって社会のあり方も大きく変化し得る、ということを示唆しているからに他ならない。

さて、システムである人間の単純な複数の集まり（かたまり）を人間社会と捉えようするとき、それは社会の成立の必要条件ではあっても十分条件とはいえない。飛行機内の乗客達、公園で見られる散歩者群及び海水場の海水浴客達等は社会を形成しているとは考えられない。そこには、一人の人間の行為が他の人間に何らの影響や変化も与えなければ逆に与えられることもない。また、社会は複数の個人の単なる総和でもなければ、社会を成立させている個々の人間に還元することもできない。個人を他者から全く独立した自律的なシステムの単位として捉えようとする、逆に人間そのものの姿を見失ってしまうのである。人間は社会的存在である。先に、人間は他者との相互関係を通して、一定空間内や時間的な流れの中で、も

はや単なる孤立的状態から開放されて一つの社会的な共同ないし共存状態にはいり、そしてその時、個人は単なる有機体としての個体ではなく社会的存在になると述べたが、人間の本質的な姿は機械論的、還元論的な思考によって捉えることは不可能なのである。社会現象を実体的なもの、絶対不変なものとも捉えず、諸変数の活動や働きとして観察しその運動過程に共存関係を発見したのはドイツのジンメルを先駆として、経済学者・パレート (Pareto, V) —— 彼の均衡概念は経済学や社会学等に大きな影響を与えた —— を挙げるができる。ジンメルはその著書『社会学の基本問題』(Grundfragen der Soziologie) において、「実在するのは『個人』だけと称して、多くの個人の集合体へ向けられる認識をすべて思弁的な抽象概念や非実在物を対象とするものと論断するのは、科学の本質を誤解するものである⁽⁵⁾」。「従って、個人だけが科学の具体的対象である、と頑固に主張してみても、私たちが、カトリック教や社会民主党の歴史、都市、帝国、婦人運動、手工業の状態など、百般の全体的現象や集团的構成物について論ずるのを妨げることは出来ない。——そして、社会を論ずることも同じである⁽⁶⁾」と主張している。

改めて強調するまでもなく、広義であれ狭義であれ社会をシステムとして捉えようとする試みについては、学説史的には第二次大戦後の社会理論の一つの大きな潮流を形成したといえる社会システム論 —— ここで敢えて「社会システム」(social system) とせずにシステムとしての人間社会としたのは、学説史的な従来からの社会システム論との混同を避けるためである —— の展開がみられ、種々の概念及び定義等が積極的に議論されている。例えば、公文氏は社会システムとは複数個の主体を要素とする規則的・持続的な結びつきが一個の全体を構成しているものをいうとした⁽⁷⁾。社会システムという概念を社会学の研究領域に定着させたパーソンズは、「社会体系とは、複数の個人行為者が、少なくとも物的ないし環境的側面を含む状況において、お互いに相互行為をしている事態にほかならない⁽⁸⁾」。それは、「もちろん、個人としての行為者の関係によって、ただそのよう

な関係だけによって成り立っている。関係自体は、相互に方向づけられた、関係の当事者の行為の凝集である⁹⁾」と説明し、社会システムの構成要素として相互行為若しくは役割が指定されている。パーソンズが具体的な個人行為者ではなく相互行為や役割といった分析的な概念によって社会システム論の構築を試みたことは、社会システム論の展開力を著しく高めるものであった¹⁰⁾。他方、西ドイツにおけるパーソンズ理論の後継者といわれるルーマンは、ハーバマス (Habermas, J.) と同様にコミュニケーション機能に着目し、著書『社会システム理論』(Soziale Systeme)の中で、「社会システムは、コミュニケーションをとおして形成されるのだが、そうした社会システムにおいて、要素への分解の方途としてはコミュニケーションしか用いられない¹¹⁾」。「コミュニケーションは、社会システムの自己構成の基礎的な統一体であり、行為は、社会システムの自己観察と自己描写の基礎的な統一体なのである。コミュニケーションも、行為も、高度に複合的な事態なのだが、それぞれそうした統一体として用いられており、そのために必要な形態へと縮減されている¹²⁾」と述べている。ここでは、社会システムの構成要素を行為とするかコミュニケーションに求めるのかを確定したり、社会システム論を展開しようとは考えていない。社会システム論の展開は、社会という研究対象にシステム概念及びシステム論的な思考(システム思考)¹³⁾の適用によって行なわれているが、システム理論そのものの理論発展が社会理論に与える影響は計り知れないことは容易に予測し得ることである。

なお、ここではシステムとしての人間社会について検討してきたが、個人としての人間そのものの存在価値をいささかも減ずる意図はない。それは、ベルタランフィが実に適切に次のように表現している通りである。「人間社会は、遺伝的本能に支配され上位に位する全体の法則によって制御されるアリヤシロアリの社会ではない。それは個人の達成に基礎をおいており、もし個人が社会的機械の一つの歯車(a cog in the social machine)とされてしまえばその時には滅亡する¹⁴⁾」と。また、社会は有機体とは同

一視し得ない⁽¹⁵⁾。現実の人間社会においては、有機体にみられる諸器官相互及びそれらと生命体全体との間の相互関係とは異なって、利害対立やコンフリクト、紛争ないし戦争等が絶えず起きているからである。

- 注 (1) Laszlo, E., *A Strategy for the Future*, *op. cit.*, p. 29.
- (2) Bowler, T. D., *General Systems Thinking: Its Scope and Applicability*, Elsevier North Holland, 1981 (中野訳『応用一般システム思考』、紀伊國屋書店、1983、297頁)。
- (3) 富永健一『社会学原理』、前掲書、13-14頁。
- (4) 山口節郎『社会と意味 —— メタ社会学的アプローチ ——』、勁草書房、1982、19頁。
- (5) Simmel, G., *Grundfragen der Soziologie: Individuum und Gesellschaft*, *Sammlung Göschen*, Berlin und Leipzig: Walter de Gruyter, 1971 (清水訳『社会学の根本問題』、岩波書店、1979、14頁)。
- (6) *Ibid.*, (同訳書、15-16頁)。むろん、彼はシステムという考え方を自覚的な用語法として導入してはいない。彼は社会を機能的に把握することにあつた。
- (7) 公文俊平『社会システム論 —— 社会科学総合化の試み ——』、日本経済新聞社、1978、122頁。
- (8) Parsons, T., *The Social System*, New York: The Free Press, 1951 (佐藤訳『社会体系論』、青木書店、1974、11頁)。
- (9) Parsons, T. & Shils, E. A. (eds.), *Toward a General Theory of Action*, New York: Harvard University Press, 1954 (永井他訳『行為の総合理論をめざして』、日本評論社、1960、37頁)。
- (10) 友枝敏雄『相互行為論と社会システム論』『社会と歴史』(新・岩波講座哲学11)、岩波書店、1986、90頁。
- (11) Luhmann, N., *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main, 1984 (佐藤監訳『社会システム理論(上)』、恒星社厚生閣、1993、258頁)。
- (12) Luhmann, N., *a.a.O.* (同訳書、278頁)。また、ルーマンは、*Die Wirtschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main, 1988 (春日訳『社会の経済』、文真堂、1991)において、全体社会の経済活動、或いは全体社会の中で分化し切った経済システムもまた、コミュニケーションに基づいて行為を決定し、行為の帰責をなすシステムと捉えられねばならない、と指摘している。
- (13) システム思考については以下の文献が有益な示唆を与える。Cf. Checkland, P. B., *Systems Thinking, Systems Practice*, New York: John Wiley & Sons,

1981. ; Weinberg, G. M., *An Introduction to General Systems Thinking*, New York : John Wiley & Sons, 1975.
- (14) Bertalanffy, L. von., *General System Theory: Foundations, Development, Applications*, Rev ed., New York : George Braziller, 1968, pp.52-53.
- (15) この点については、富永健一『社会学原理』、前掲書、178-183頁に基づいている。

(未 完)